

【講評文】8月10日（水） 10校目

## 「息をする私は、今年の終わりの二日前、心臓を鳴らす私の言葉は白くなる。」 岐阜総合学園高校

新型コロナウイルスなどによって生活が制限され、思うようにならない毎日を過ごし、気づけば高校生活に終わりが近づいてきてしまっている。高校生活の時間の流れは速く、あっという間に過ぎ去っていく切なさが伝わる作品でした。

装置では、箱の中にぬいぐるみやヘルメットなどの小物が詰められており、過ぎ去っていった思い出や楽しかった思い出を表しているのではないかという意見が出ました。「息苦しさ」を台詞だけで表現するのではなく、スモークを使うことで視界や舞台が狭まって見えるため、息がしづらい空間を分かりやすく感じさせる工夫がされていました。さらに、時間が経つにつれスモークがだんだん薄くなっていくため、最初の息苦しさとの対比や主人公の心境の変化が伝わりました。

音響では、音が少し大きくキャストの台詞が聞こえづらいという意見が出ましたが、主人公の視点から見ると、主人公はヘッドホンをして音楽を聞いているため、むしろ周りの声あまり聞こえない状況表現しているのではないかという意見もありました。

輪になって歌う場面では、みんなで一斉に歌うことにより、歌詞にある「時間が止まればいいのに」という思いを、主人公だけではなく他のクラスメイトも同じように思っているのだと感じられ、同世代の私たちが須らく抱える苦悶や懊悩をここでもやはり表現されているのであらうと感じました。

ラストシーンでは、「冬に吐く息が白くなる＝言葉が可視化される」という仕組みで、音楽を聞いていた主人公がクラスメイトたちの話している様子を視認できたことにより、息苦しくて見えてなかったものが見えるようになって、クラスメイトの輪の中に自分も入っていたことに気づき、クラスに馴染めていなかった主人公がだんだんと馴染んでいったことが伝わりました。視覚的に「見る」ということが、周囲の認識や他者の中の自己認識と繋がり、人とのつながりを求めるということは、周りと自分を「見る」ことが必要なのだと感じさせられました。これは、今の私たちにも重なる部分があり、今この瞬間も時間が経てば一瞬の出来事になってしまうと感じられました。私たちが普段感じていることをそのまま表現されており、一つ一つの台詞にとっても共感できる劇でした。

岐阜総合学園高校のみなさん、上演お疲れさまでした。

(文責 岐山高校 3年酒井環 1年棚橋奏心 藤根蒼)